

つながれ 社会へ

—— 知の貯蔵庫を開放する

法人化を機に誕生した文化資源研究センター。
民博のモノ・情報・人を
文化資源として社会にひらき
人びとの知性や感性を刺激することをめざす。
進行中のプロジェクトや今後の構想について
センター長、石森秀三教授に聞いた。

「文化資源」は文化のもと

まず、文化資源研究センター設立の経緯からお話しただけです。
石森 民博は大学共同利用機関ですが、博物館をもつ大変ユニークな研究機関でもあります。数年前に法人化が現実のものとしてせまってきたとき、新たな民博のあり方を多角的に検討しました。そのなかで博物館部門の未来像も検討課題としてがあり、民博のもつ文

化資源の活用を中心とした新しい組織をつくるべきだ、との結論に達しました。

文化財や文化遺産などは本誌読者もよくご存知でしょうが、文化資源というのはあまり耳慣れない言葉かもしれません。

石森 文化財、文化遺産というのと、しるべき専門家が保存・管理し、一般の人たちは手を触れてはいけないもの、まれに鑑賞するものといったイメージ

をおもちでしょう。しかし文化資源は、新しい文化を生み出すものになるモノや情報であり、資源として広く社会で活用されるべきものです。

世界に誇りうる民博の研究資料という試みです。

石森 できるだけ多くの人びとに五感をとおして研究資料に接してもらい、さまざまな民族の暮らしを知り、多種多様な文化に思いをめぐらしていた

石森 そのために標本資料をはじめ、研究データの整理、保存、公開の強化に努めています。たとえば、民博には保存科学の専門家があり、大型民族資料の加温による殺虫処理システムを開発しました。これは、民博最初の特許申請になりました。保存技術について

も研究はほとんど進んでいます。それから、情報の公開も大きな仕事になるのではないのでしょうか。

石森 研究成果にもとづいた各種のデータベースがありますが、今まではじゅうぶんそれぞれの情報公開ができていませんでした。これは、より多くの方々データベースを利用していただく仕事を進めていきます。

また博物館部門として、展示の創意工夫も重要課題になっています。石森 民博は約七〇名の専任の研究者を擁し、多岐にわたる研究をおこなっています。運営資金の大半は国費、つまり税金ですから、われわれの得た成果を国民に開示する義務があります。いかにわかりやすく研究成果を提供し

ていくかという意味において、展示手法の研究開発も重要です。一九七七年一月に一般公開した常設展示を例にとると、マイナーチェンジの積み重ねで、大きな変化のな

いままです。

その結果、残念ながら、民博の展示が来館者の多くに魅力のないもの

となってきました。

石森 七七年にオープンした年の入館者数は約六〇万人もありましたが、平成一六年度の入館者数は約一六万人と落ち込みがはなはだしい。民博の展示が国民にどのようにとらえられてきたのか、入館者数が物語っているといえます。もちろん、展示だけが入館者減少の原因ではないでしょうが……。

展示について、どのような改善策を講じておられますか。

石森 文化資源という切り口で研究資料をとらえ直してみると、さまざまな試みが可能になります。昨年の七月には「みんなよく動物園」という企画展示を開催しました。

動物をテーマにした展示。トラ、ゾウ、ウシ、ラクダなど、世界各地の人

究資源を蓄積してきました。

石森 標本資料約二五万五〇〇〇点、映像・音響資料約七万点、文献図書資料が六〇万冊を超えています。その他の資料や情報もふくめて、これら膨大な研究資源を社会に還元する体制をつくっていきます。

三〇年の歳月をかけてインフラとしてきたものをこれからはアウトプットもしていこう、ということですね。では具体的に、どのような形で活動し、目標を達成していこうとお考えですか。

石森 ひとつは法人化後の民博の社会的なミッション（使命）にかかわっています。昨年四月より大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員となりました。もちろん従来も民博の文化資源を研究者に供してきましたが、もっと効率的な大学共同利用に合うシステムを整えるべく再構築をはかっています。

研究機関のネットワーク化をおこない相互利用を促進するものですね。

民博は可能性の宝庫です。ただ、この取り組みには、研究者の意識改革が不可欠ですね。調査研究に没頭するばかりでなく、社会のニーズに敏感になり、外部とのコミュニケーション力をつけていかなばなりません。これが世界的な流れなんではないでしょうか。

石森 すでに欧米の博物館では、リソース（資源）の開放は当たり前です。「ここに来たらしらうい！」「すごいことを発見した！」などと感動をよぶ仕掛けをたややす、五感にうつたえる博物館でありたいです。博物館は知の貯蔵庫、感動の貯蔵庫です。民博の研究者も意識を切りかえ、研究資料や研究成果をどんどん社会へ還元していくべきです。

民博の文化資源をアウトプットする

民博の創設は一九七四年六月。満三〇年を迎え、この間にさまざまな研



特別展に向けて展示物の整理をおこなうスタッフ

ていくかという意味において、展示手法の研究開発も重要です。一九七七年一月に一般公開した常設展示を例にとると、マイナーチェンジの積み重ねで、大きな変化のな



文化資源研究センター長
石森秀三教授



編集長
八杉穂穂教授



特別展「アラビアンナイト大博覧会」において活動中のミュージアムパートナーズの一員

的に組織化しようという試みです。石森 これまで博物館部門の活動は委員会方式で運営されてきました。ただ、委員会というのはともすれば無責任になりがちなので、当センターができてからは、専門家が責任をもって五つの分野（資料管理、調査・収集、情報化、展示、社会連携）を推進していく形になりました。

われわれ研究者は、何かしたいときにプロジェクト化を考えますが、そういうときに文化資源研究センターの門を叩くと、ご協力いただけるのですか。

石森 平成一六年四月からは、文化資源プロジェクトという方式をとっており、民博の専任教員や客員教員であればだれでも企画提案をして、認められれば文化資源プロジェクトを立ち上げ

ることができま。五つの分野について、平成一六年度は六〇数件のプロジェクトが実施され、それぞれの提案者がプロジェクトリーダーとなって進めています。当センターの専門家がサポートしますようにできてきました。

文化資源プロジェクト方式をとることで何がかわるのでしょ。石森 最初のころでもお話ししましたが、従来だと、たとえば外国で標本資料や映像の収集・取材をする場合、ともすればそのことだけで終わってしました。しかし、文化資源プロジェクトになってからは、自分の研究のためだけに資料を集めるのではなく、つねにそれらをかかめる形で社会還元していくかという視点が大切になってます。

そういう視点はこれからますます重要になってくるでしょう。石森 従来は単年度でプロジェクトが終わりがちだったのですが、現在進行中の六〇数件のプロジェクトのうち約六割は複数年のプロジェクトです。社会還元を視野に入れたプロジェクトが増えています。そういう意味で、これからは民博もより社会とつながりの深い研究機関になっていくのではないかと期待しています。

読者のみなさんにもどんどん民博に来ていただいて、さらに社会にひらかれた博物館になるよう応援していただきたいと思ひます。今日はありがとうございました。



「みんなく動物園」に集まった子どもたち



「みんなく」で学習する小学生。「みんなく」は現在7種類あり、小・中学校、高等学校を対象に貸し出している

韓国の小学生の持ち物をスーツケースにつめ合わせた「みんなく・ソウルスタイル」

社会や学校との連携を強化していきたい

石森 親子で夏休みのひとときを楽しんでもらいたいと思ひます。民博は研究の対象として、さまざまな動物に関する資料を有しており、それらを活用して「みんなく動物園」というコンセプトでファミリーに向けて提示する、という試みでした。かつてなかった試みですが、携帯電話を活用した情報提供やゲームを取り入れたワークショップもおこない、楽しめる展示手法開発の手こたえを得ました。こういった形で、文化資源の展示をおして、研究成果を広く社会に還元していく努力を始めたいです。

民博のそういった努力の中核的な役割を文化資源研究センターが担っていくということになりますね。

石森 法人化にともなう、従来以上に社会にひらかれた研究機関、博物館にならなくてはならない。つまり、社会連携が重要になります。

難しいことですが、実現していきたいです。

石森 研究者同士の連携は、大学共同利用機関という形でじゅうぶん役割を果たしています。ところが、一般に向けてとなると、必ずしも十全な社会連携を果たしてきただけとはいえませんが、このセンターには社会連携の研究を専門におこなっている教授がいます。社会との連携、コラボレーション（協働）をどうはかかっていくのか、という研究

とともに、具体的な実践もおこなってきたいと考えています。

昨年の九月からスタートした「みんなくミュージアムパートナーズ」制度も社会連携の一環です。

石森 これまではボランティアというかたちで、特別展のときなどにさまざまな協力をお願いしてきました。法人化後はたんなるボランティアではなく、ミュージアムパートナーズと位置づけて公募をおこない、その結果、約一五〇名の応募がありました。

石森 パートナーズの方々には社会と民博の橋わたし役として、主体的に新しい活動を提案し、実施していただきたいわけですね。

小中高など、学校と博物館の「連携」についてもこのセンターで扱っておられるのです。

石森 はい、すでにこの文化資源研究センターを中心にいろんな試みが始まっています。とくにセンターの客員である高田浩二教授によって、博学連携のさまざまなプロジェクトが進められています。これなども法人化以前にはなかった新しい動きです。すでにお話しした「みんなく動物園」というのも、高田教授にご指導いただいたもので、子どもたちが民博にくるることによっていろんなことを学べる学習プログラムの開発をおこなっています。

これは民博にきていただくという試みですが、民博のほうから外へ出ていくという企画もあるのでしょうか。

石森 従来から、「みんなく」というスーツケース一個分ぐらいの入れ物にいろんな資料を詰めて学校にお貸しする学習キットがあります。また現在、「みんなく動物園」を外部で展示する試みを検討しています。私も福井大学、福井県立若狭歴史民俗資料館の二者が協力して、「みんなく動物園」を福井にもついで、という企画です。これは、標本資料をもつていくだけではなく、学習プログラムもパッケージさせる予定で、三者で共同開発しています。

昨年実施した「みんなく動物園」には日本全国の動物園関係者がこられて、ご好評をいただきました。関係者がこからの課題としていたことを、民博がいち早く学習プログラム化して提供してくれたので、今後いろんな形でコラボレーションができれば……との希望を表明していただいております。

動物園も利用者の視点で変わっていかねばならない時代ですからね。

石森 今年の夏は「みんなく水族館」という企画展示をおこなう予定です。

プロジェクトをおとしたメッセージ

研究者というのはどうしても組織になじみにくい傾向がありますが、昨年の改組は、民博の研究者の力を有機

表紙モノ語り

飛行機模型

特別展「きのうよりワクワクしてきた。」出展作品/上里浩也 作 長さ/40cm

はたよしこ

絵本作家/ボナレス・アートギャラリー NO-MA ディレクター



金箔を張り込んだ実物そっくりの金剛寺のミニチュアを作るなど、世の中には自分の愛してやまない物を、自らの手で再構築することに執拗なエネルギーを注ぐ人がいる。この飛行機の作者、上里浩也さんその思いは同じなのだろうか。

彼の作品は私にとって衝撃的な魅力を持つ。それはこの作品の材料が単なる薄っぺらい紙とセロテープだけで作られているから。いまどき大きなホームセンターなどに行けば、あらゆる便利な材料が揃っているというのに、彼は紙とセロテープという、このはかないほどヤワな素材で、世界中の飛行機をも二〇年以上も作り続けている。複雑な流線形の機体の中には、やはり紙が幾重にも折り畳まれてぎっしり充填されており、ズシリとした手こたえすらある。この制作方法は彼の独自の考案によるものだ。

上里さんには自閉症という先天的な脳の障害がある。この障害は他の人のコミュニケーションが不安定な状態と形容される。彼は少年の頃から父親と飛行機を見に行くのが大好きで、いつの頃からか身近にある紙を使って作り始めたという。彼にとって、その時間は自分で決めた自分の方法で、自分を確かめる大切な時間でもあるのだらう。その方法が合理的かどうかは、彼にはほとんど意味がない。彼にとって大切なのは「自分の決めた方法」に忠実だということなのだ。

人は障害を持つことで、深い海の底を泳いで、忘れられていた知恵を汲み上げてくるのだらうか。私たちは豊かに溢れるほどの物の洪水が一杯一杯に浮いているのがおぼろけになっているような気がする。

上里浩也さんの飛行機は銅にも勝る強さで、光っているように私には見える。

未来へひらく
ミュージアム